

平成 30 年度日本語指導が必要な児童生徒支援研修会 焼津市

検証実施機関（団体）：静岡県教育委員会 焼津市教育委員会
静岡県教育委員会 静岡県教育委員会 静西教育事務所 南里 哉子

1 検証対象の研修・授業について（該当するものにチェックを入れてください。）

養成／研修	<input type="checkbox"/> 養成 <input checked="" type="checkbox"/> 研修
タイプ	<input checked="" type="checkbox"/> 基礎教育 <input checked="" type="checkbox"/> 専門教育 <input checked="" type="checkbox"/> 支援員教育
研修・授業日（期間）	2018年 8月 28日（火）
総時間数	90分
研修・授業科目名	平成30年度日本語指導が必要な児童生徒等支援研修会 焼津市
受講者	人数：54人 年齢層：20代～60代 外国人児童生徒等教育の経験：ほぼ有り 日本語指導（成人対象を含む）の経験：ほぼ有り

2 地域及び学校現場の外国人児童生徒等の受け入れの状況

(1) 当該自治体における外国人児童生徒等の数・分布とその民族背景

市内で外国人児童生徒が在籍している地域とそうでない地域の差が大きい。多い学校ではひとクラスに数人の児童生徒が在籍しているが、少ない学校では校内に数人しか在籍していない。全体的に見るとフィリピンにルーツをもつ児童生徒が多く、次にブラジルルーツの児童生徒が続く。

(2) 当該自治体における外国人児童生徒等の受け入れ・指導体制

市雇用の支援員が30人ほどおり、日本語支援や教科支援など担当に分かれて派遣されている。基本的に編入後の初期指導は各学校で行っている。焼津市内では2校の中学校、3校の小学校に加配教員が配置されており、派遣された支援員と協力して取り出し指導を行っている。また、焼津市では日本語学習コーディネーターを1人配置しており、支援員や新任加配教員に対する支援や助言を行っている。

(3) 外国人児童生徒等教育に関わる教員（一般教員を含む）、支援員の教育力の課題

加配教員が配置されている学校では特に、教科担当や在籍学級担任の教員が、加配教員や支援員に指導を任せている例が多く見られる。学校全体で支援を行おうという意識をもつことが今後の課題であるとともに、在籍学級における授業の工夫を周知していかなければならない。また、市で研修が行われているものの、支援員の力の差が大きいため、今後の研修内容や支援員の役割分担などが求められる。

3 研修・授業の成果について

(1) (受講者アンケートより)

①受講者の研修への期待

- ・各校の取組、事例
- ・指導方法、内容
- ・教育課程編成、計画について
- ・教材

- ・児童生徒、保護者との関わり方、コミュニケーションの図り方
- ・心理的サポートの仕方
- ・担当としてすべきこと
- ・外国人児童の現状
- ・県や市の教育方針、考え方とその具体的施策
- ・カウンセリング
- ・高校進学について

②受講者の研修内容の理解度・満足度

ア：12% イ：54% ウ：10% エ：2% 無回答：22%

- ・指導計画が大事だとはわかっているが、現場では日々の指導で手一杯である
- ・思った以上に内容が濃かった
- ・コミュニケーションの取り方について知りたかった
- ・最初「特別の教育課程」が何を表しているか全くわからなかった

③関心を高め、教育力の向上を促したと考えられる内容・活動

- ・各校の実践を開けたこと
- ・指導内容（指導プログラム）の詳細、決定方法
- ・個別の指導計画の作成方法
- ・計画を立てる上で様々な立場の人から話を聞くことの重要性
- ・児童生徒の実態によって指導内容が違うこと

④受講者が今後望む研修・授業の内容と活動

- ・実践例、授業内容、指導方法
- ・教材
- ・やる気のない生徒にやる気を持たせる方法
- ・加配教員が二人いる場合の運営
- ・進路
- ・心理的サポートの仕方（不登校気味の子が多いため）
- ・DLAの結果を踏まえた指導内容
- ・担当以外が参加できる研修（日本語支援に関して理解が浅い教員が多い）
- ・目標設定方法
- ・カウンセリング

(2) 研修企画の立場から見た、研修の成果と課題

受講者の期待と実際の研修内容はだいたい一致していた。また、個別の指導計画作成に関して、どう計画を立てたら良いかという壁は多少低くなった印象。

今回は焼津市独自の書類である「特別の教育課程編成届」に何をどう書くかに焦点を置いたため、実際に子どもに対し具体的にどんな指導をするかは言及できなかった。市として教科指導に力を入れていく予定とのことなので、今後は日本語と教科の統合学習について、実践例を交えた研修が必要である。

4. モデルプログラムについて

(1) 養成・研修内容構成（報告書 pp. 72-76）について（意見）

内容が基礎・専門・支援員向けにそれぞれ書かれており、大変わかりやすいが、様々な立場の方が参加される研修においては、「<支援員>と書いていないから取り扱ってはいけないだろうか」と悩んでしまう項目もある。よって、項目によってはカテゴライズされていない方がいい場合がある。

(2) モデルプログラム（報告書 pp. 207-244）について（意見）

内容によってどのような活動をしたらいいか考える上では非常に参考になった。講師やファシリテーターとして研修を進める身であれば、更に多くの活動が出てくるはずなので、例えばウェブ上で実際に行った活動について簡単な実践報告ができるような場があればより良い研修が作れるのでは。

(3) モデルプログラムの活用で研修の運営が円滑になったか。

現場の声をそのまま研修に活かせる立場であれば、ガイドブックのような存在になってくれると思う。現場と講師の仲介役だと、どちらかがモデルプログラムを知らなければ逆にやりにくくなる（こちらがモデルプログラムの内容を想定していても、講師側がそれを知らなければ意思の疎通が難しくなるため）。

(4) モデルプログラムの活用を通して、研修・養成で、どのような力を高めてほしいか。あるいは、高めるためには、どのような活用の仕方が必要だと思うか。

日本語支援に関する様々な知識を吸収し、実践に活かす力。

講義を聞くだけでなく、グループワークなど個別に考える活動も必要になるため、研修を組み立てる際にモデルプログラム内の活動を参考にすると良いのでは。